

イエスはファリサイ派の人々の非難を避けるために一時避難してきた異邦人の地フェニキアで、一人の女性と出会いました。彼女はイエスに救いを求めて来たのです。しかし、イエスは彼女の願いを三度拒絶しました。最初は彼女の願いを無視し、次は自分が神さまから遣わされたのはイスラエルの人たちのためであって、異邦人のためではない、と言って、最後はイスラエルの人たちに与えられるべき神さまの救いを小犬(異邦人)にやってはいけない、と言ってです。それでもなお、彼女は必死に求め続けました。しかし、この話のポイントは諦めずに願い続ける熱心さはいつか必ず通じる、ということではありません。この話のクライマックスは「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」というイエスの言葉に対する彼女の応答です。彼女は怒って去るのではなく、「主よ、ごもつともです」と言ったのです。彼女は自分をパンをいただく資格のある子どもではなく、資格のない小犬の場に置いたのです。そのことを認めた上で、「しかし、小犬は主人の食卓から落ちるパン屑をいただいて、それで養われていくのです。」と言ったのです。ここに、彼女の必死な思いとイエスに対する深い信頼が感じられるのです。イエスは彼女のこの姿に接して態度を変え、「婦人よ、あなたの信仰は立派だ」と言いました。「あなたの信仰は大きい」という意味です。「大きい信仰」とは、彼女のようにイエスが憐れみの心によって手を差し伸べ、救いを与えてくれることを信じて疑わないことです。そしてそれ故に、どんなに無視されても、拒絶されても、なおも執拗に求め続けることなのです。そして、彼女の娘は癒されました。

10章5~6節のイエスの言葉から、イエスは「信仰はまずユダヤ人のものである」という考えがあったとしても、現実に異邦人がイエスを信頼する場面に出会ってしまったのです。イエスが意図しなかったのに、この異邦人との出会いの中で、イエスが変えられ、結局は彼女を受け入れた、と記すのです。

イエスの弟子たちや最初のキリスト者はみなユダヤ人でした。初代教会にとって、異邦人をどのように受け入れるかは大きな問題でした。彼らは「異邦人も救いにあずかれるか」と議論して、異邦人への働きかけを始めたのではなかったのです。むしろ、異邦人がイエスを信頼するようになったという現実が先にあり、それがユダヤ人から始まった信仰共同体を変えていったのです。マタイの信仰共同体の人たちが直面していた異邦人たちと共に生きて行かざるを得ないという現実を、遡って、イエスの姿に重ねているのが、今日の物語であると理解することができるのではないかと思います。